

シマ社会の新たな知の循環に向けた 奄美の集合的記憶形成に資する字誌の利活用

プロジェクトの2つの狙い

奄美群島内全域の戦後字誌の目録化

奄美群島の字誌を活用した地域学習プログラムの開発と

シマ・字の学び直しの機会創出

プロジェクトメンバー

- ・ 農中至（法経社会学科地域社会コース准教授）
- ・ 高梨修（「鹿児島近現代」教育研究センター客員研究員）
- ・ 小栗有子（法経社会学科地域社会コース教授）

《プロジェクトの成果》

【集落・字誌を活用したシマ・字の学び直しの機会創出】

「おしえて高梨さん！～集落誌・字誌・自治体誌・郷土誌（史）の10のこと～」

第一回：2025年2月2日（日）：高梨・農中・小栗（奄美市奄美博物館）

第二回：2025年2月3日（月）：高梨・小栗（おきのえらぶ島観光協会エラブココ）

《学習者：「奄美＜環境文化＞教育プログラム」の修了生ほか》

集落誌・字誌・自治体誌・郷土誌（史）とは？各史・誌の違いは？史・誌の歴史とは？いつ利用する？どう利用する？執筆上の注意点は？
編纂上ここがけていることは？史・誌の価値・意義とは？史・誌を住民や行政にどう活用してもらいたい？史・誌の住民主体の共同作成にどのような可能性がある？

おしえて高梨さん！ その2

集落誌・字誌・自治体誌・郷土誌（史）の違いはなんですか？

奄美群島と沖縄県では、こうした地域の記録化に対する取り組みがだいぶ違います。奄美群島を中心に説明してみたいと思います。

違いのポイントは、「地域の対象範囲」「編纂主体」「学術性」ということになります。

- 「集落誌」は、奄美・沖縄で根幹となる地域単位（シマ（集落））を対象としたもので、編纂主体は個人、あるいは集落となります。シマ（集落）で生まれ育った人が内情から記述したものになります。学術的な内容にこだわらない、編纂が行われる機会が多いです。
- 「字誌」は、「集落誌」とほぼ同義ですが、奄美群島では「字誌」という呼び方はしていません。沖永良部島・身振島について断言できませんが（以下、字誌は「付表記」、住所表記の地名上、複数集落がほとんど一つの文字になる地域もある）、（仮に）集落のような内情を「字誌」と呼ぶ場合はあるかもしれません。シマが基礎単位なので、奄美大島では「字」は馴染まないというところではないでしょうか。
- 「自治体誌」は、地域の体系的な記述を行うため、専門家を中心とした編纂委員会が組織され、外からみた客観的で学術的な内容に基づいてまとめられています。
- 「郷土誌（史）」は、「自治体誌」のことを指す場合もありますが、たとえば、厚狭町「奄美史」のような島を対象としたもの、奄美群島を対象としたもの等があります。個人による執筆が多いような印象があります。

地域誌編纂の流れ（高梨説）

薩摩藩統治時代 近代 米軍占領統治時代 現代 現在

（島域・島内に対する）外からの目

大島私考 南島雑話写本 南島雑話 政治地域の把握 異文化理解 資産総点検

奄美大島史 近代教育と自己認識 行政地域編纂

内からの目

自治体誌編纂 字検集落誌 名瀬市誌 根瀬部誌 大奄美史 日奄同祖論 集落誌編纂 字検集落誌 奄美方言分類辞典 奄美方言分類辞典 奄美方言分類辞典

おしえて高梨さん！ その4

高梨さんはどういった時に、集落誌（字誌）・自治体誌・郷土誌（史）を利用するのですか？

●まず私の博物館勤務時代を振り返ります。
これらの文献をよく手にしていたのは、①**業務で質問を受けた時**です。
自治体誌をほぼ専断のように使用していました。調べた項目は、他の自治体誌でも比較して調べいきます。さらに該当する分野の専門書でも調べて、意味や背景等の理解を深められるよう勉強してきました。
それから②**地域に調査へ出かける時**は、調査地域に関わる集落誌・自治体誌に必ず目を通していました。
机上の勉強というのは、現場での「直観力」を高めるようなものです。地域に関する知識の引き出しを増やしていくために、集落誌・自治体誌は欠かせないものでした。
●次に私の現在の「大和村教委」での利用方法です。
『大和村誌』『奄美大和村の年中行事』『奄美方言分類辞典』の3冊は出勤すると毎日のようにみえています。
①とにかく集落に行く時は、常に『大和村誌』で確認してから出かけます。
②旧暦行事等がある時には、やはり『大和村誌』と『奄美大和村の年中行事』で確認します。
③大和村の方で何というのか等を調べる時には、『奄美方言分類辞典』をみえています。

おしえて高梨さん！ その5

高梨さんはどういった時に、集落誌（字誌）・自治体誌・郷土誌（史）を利用していますか？

地域のことを学ぶ参考書として、自治体誌はどのくらい便利なものはありません。
その利用機会は「その4」で説明したとおりです。
34歳で奄美博物館の学芸員になりましたが、奄美群島の拠点博物館の学芸員となることは、ものすごいプレッシャーでした。奄美群島の歴史と文化に対する広範な知識と専門的理解がなければ仕事になりませんから（資料収集も展示解説もできない）。
特に歴史は、通史で理解できるようにすることが必須と考えていましたが、その知識の習得には非常に苦労しましたし、長い時間を要しました。
※ 知識の習得は、奄美博物館の学芸員としての活動、奄美博物館、奄美市から関係機関等の機関に頼りました。
この「奄美＜環境文化＞教育プログラム」で奄美群島の歴史について、通史で解説していますが、あれは30年かけて勉強してきた私の通史理解の現時点のまとめです。
そうした勉強をするのに使用してきた参考書が、必ず通史がほとめられている自治体誌です。鹿児島県から沖縄県まで、本当に自治体誌ばかり読んでいた時期がありました。
あれがやってきた特殊な方法として、伝承から通史を導くという方法があります。その時には、まず集落誌をさがして「字」を確認して、それから集落誌をみて確認するから「字」で確認している。それを繰り返して、集落誌がなくても「字」で確認する方法は化してしまいました。それで通史の発見できるのですから、集落誌というものはすごい世界だと思っています。

※「奄美群島内全域の戦後字誌の目録化」はより精緻化すべく継続課題とした。スライドは使用した講義資料の一部。

学習者のさまざまな反応

郷土誌は研究者のものではなく、未来を紐解く、観光の基本になる、など、大事な根っことなる事に気づかせていただきました。

市町村誌の存在は公になっていることも多く手に入る機会もありましたが、集落誌の存在を取り上げていただき考える事ができました。集落誌は「地域を知る手がかり」という言葉が印象的です。地域を知る手がかりもなるならば、どんなものでも文化遺産としての意味があるという事を改めて感じる事となりました。字検村の集落誌を読み進めています。冊子となっていない資料についても深めていき地域の財産として大切に扱っていきたいと思います。今回、テーマに取り上げていただきありがとうございました。

沢山の種類の誌があり、内容のあり方がわかりやすく調べてみたい分野が理解できてとても勉強になりました。

経験談は沢山あるので、機会がある時には積極的に伝えて行こうと思います。

学ぶ過程としての字誌づくり ～沖縄からの示唆～

- 字誌を住民がつくるということの可能性と意義または限界
- ①住民が字の歴史の主体であることの確認
 - ②字誌づくりの過程に内在する学習的側面
 - ③共同体から独立した個ではなく共同体に位置づく個という限界
 - ④書き手・編集側のジェンダー・アンバランスの問題
- ※ 奄美市「神橋のつなぐ社会の社会教育アプローチ」（資料出版、2013）、山城千秋「神橋の「シマ社会」と青年会活動」（エイデル研究所、2007）、小林文久・島原正樹編『おきなわの社会教育』（エイデル研究所、2002）など参照のこと。
- ※ 神橋を字誌をどこに位置づけるか？

芦花部誌を読み返すこと。部落のストーリーを説明しながらシマ歩きをすること。チャットGPTを活用してクイズ集を作ってみる。誌を読み返すとときに要約版のさらに簡易版を自分がシマ歩きをするために作ってみる。

まず、住んでいる集落の集落誌が現存しているのか、また集落誌に記されている内容はこういったものなのか興味があり早速、瀬戸内図書館に訪ねたいと思います。専門家だけでなく、シマの人も一緒に作り上げるというお話を聞いてまずは自分のシマから色々情報や映像、音声と残して行きたいと思いました。また子供達にもシマの伝統や歴史に誇りに思ってもらいたいと思っていましたので集落誌というツールを使って伝えていくのはとても良いと思いました。そのためには子供に伝えるためのリライト化が必要だということも学べて良かったです。実際集落の学校は鹿児島から赴任されている先生も多いので集落誌といったツールは先生たちにとっても集落の人や子供たちと深く関わり尊重しあえるツールにもなりうるのだと思いました。

集落誌、郷土誌は聞いた事はありませんでしたが字誌は初めて聞きました。名瀬市誌が部課長の必携書になっていたように、奄美市誌が作成され職員全体の必携書となって、高梨さんのように情熱を持ってシマ愛を語れる職員が増えるといいなあと思いました。

現職でできることをできる範囲で続けていくことを、現在行なっていることを言語化してアウトプットできたことで、この内容でいいのかなと考えることができた。

手持ちの集落誌を読み込んで、シマの人の話を聞きに行きたいです。